奈良県立美術館

プレスリリース／2023 年 5 月 12 日

開館 50 周年記念 企画展

富本憲吉展の これまでとこれから

The Past and the Future of Kenkichi Tomimoto Exhibitions

2023 年 7 月 8 日(土)－9 月 3 日(日)

画像⑤「色絵金銀彩四弁花文飾壺」1960 年
国立工芸館蔵（撮影：米田太三郎）

開館記念展から半世紀、改めて振り返る巨匠・富本憲吉の生涯と県立美術館の歩み。

展覧会の趣旨

1973（昭和 48）年 3 月、竣工した奈良県立美術館の開館を飾ったのは「富本憲吉展」でした。約 400 件もの作品により奈良県出身の日本近代陶芸の巨匠・富本憲吉（1886―1963）の足跡を振り返ったもので、開館記念としてふさわしい展覧会であったと言えましょう。それから半世紀の間、当館では継続して富本の活動を取り上げ、作品の収集に努めてきました。

富本の陶業は、楽焼制作を皮切りに土焼・白磁・染付と多様な創作活動を展開した大和時代（安堵時代)、それまでに培った技術を洗練させ、かつ色絵磁器へと作域を広げた東京時代、そして金銀彩技法を完成させ華麗にして品格ある作品を作り出した京都時代という 3 つの時代に分類されます。この 50 年にわたる陶業は、独自の模様の探求、造形を通した美の表現、量産の試みといった課題に取り組んだ道のりでもありました。

これまでに多くの展覧会が開催されるなかで、陶芸家としての業績はもちろんのこと、陶芸に留まらない創作活動の全容にも目が向けられるようになり、デザイナーの先駆者としての側面や窯業地に赴いての活動の様子など、多角的に研究が進んでいます。また日本近代美術において富本の果たした役割を考える視点からも、今後の研究の広がりが期待されます。

開館 50 周年にあたり開催する本展覧会では、富本憲吉をテーマとする当館の展覧会歴をたどりながら、彼の生涯と活動を改めて振り返ります。あわせてその軌跡が示す富本憲吉研究の展望を考える機会となることを目指すものです。

富本憲吉のプロフィール

1886（明治 19）年、現在の奈良県生駒郡安堵町に生まれました。1904（明治 37）年に東京美術学校（現・東京藝術大学）図案科に入学し、1908（明治 41）年からはロンドンに留学。帰国後は木版画や書籍の装幀、染織品や革製品の制作などを手がけ、図案を軸にした芸術活動を展開しました。やがて親友のバーナード・リーチの影響で 1913（大正 2）年に楽焼の制作を始め、ほぼ独学で陶芸の道を歩み始めました。1926（大正 15）年、東京に転居。白磁や染付を中心に充実した作陶を続け、1936（昭和 11）年の九谷滞在以後は華麗な色絵磁器の作品を次々と発表します。終戦後は安堵への一時帰郷を経て京都に拠点を移し、金銀を同時に焼き付ける色絵金銀彩の技法を完成させました。1955（昭和 30）年、「色絵磁器」で重要無形文化財技術保持者（いわゆる人間国宝）に認定され、1961（昭和 36）年には文化勲章を受章しました。1963（昭和 38）年逝去。

「模様から模様をつくるべからず」という信条のもと、既成の模様によらず、独自の模様を創案することに情熱を注ぎました。また造形による美の表現にも着目し、作者自身が成形することの重要性を説きました。陶芸の近代化を牽引した作家の一人です。

出品件数

約 180 件（出品件数の合計）　※このうち館外からの出品約 50 件

展示構成（予定）	はじめに．開館記念展「富本憲吉展」 第 1 章．富本憲吉の生涯と作品 　1－1．大和時代 　1－2．東京時代 　1－3．京都時代 コラム．奈良県立美術館と富本憲吉―展覧会と作品収集の歩み 第 2 章．図案家・富本憲吉 　2－1．模様から模様を造るべからず――オリジナリティを求めて 　2－2．常用模様八種 　2－3．四弁花と羊歯 第 3 章．生活へのまなざし 　3-1．暮らしを彩る 　3-2．窯業地を巡る――量産の試行 コラム．日本近代美術史と富本
本展のみどころ	1．富本の初期から晩年までを名品とともに紹介 　当館所蔵・寄託作品に館外からの作品を加えて富本憲吉の生涯を紹介します。大和時代（安堵時代）の代表作として知られる白磁壺や染付陶板は当館では 25 年ぶりの出品、また国立工芸館が所蔵する京都時代の金銀彩の代表作など、ひさびさに奈良にお目見えする作品に注目ください。 2．富本憲吉の多方面にわたる活躍を紹介 　現在までの研究により、図案家（デザイナー）としての活動や量産品製作の試みといった富本の多彩な活動が明らかにされてきました。展覧会の後半では富本が創作した模様のバリエーション、また地方の窯業地での活動という観点から、富本の仕事を紹介します。 3．半世紀にわたる奈良県立美術館の活動をたどる 　富本憲吉展の開催と富本作品の収集は、今日まで継続的に展開されてきた奈良県立美術館の活動の柱です。富本憲吉にまつわる展覧会歴とともに当館の歩みをたどります。

▼展覧会の基本情報と来館案内

主催・会場	奈良県立美術館 〒630-8213 奈良県奈良市登大路町 10-6 TEL 0742-23-3968／FAX 0742-22-7032／テレフォンサービス 0742-23-1700 美術館公式ホームページ　https://www.pref.nara.jp/11842.htm
会期	2023 年 7 月 8 日(土)－9 月 3 日(日)
特別協力	国立工芸館
後援	ＮＨＫ奈良放送局、奈良テレビ放送株式会社、株式会社奈良新聞社、西日本旅客鉄道株式会社、近畿日本鉄道株式会社、奈良交通株式会社、公益社団法人奈良市観光協会、奈良県教育委員会
開館時間 休館日	9 時～17 時（入館は閉館の 30 分前まで） 毎週月曜日（ただし 7 月 17 日は開館）、7 月 18 日（火）
観覧料	一般＝400（300）円、大・高生＝250（200）円、中・小生＝150（100）円 ※（　）内は団体料金（20 人以上） ※次の方は会期中無料でご観覧いただけます 　①教職員に引率された奈良県内の小・中・高校及びこれに準ずる学校の児童・生徒

	②身体障がい者手帳・療育手帳・精神障がい者保健福祉手帳をお持ちの方と介助の方 1 人 ③65 歳以上の方 ④外国人観光客、留学生 ※毎週土曜日、小・中・高校及びこれに準ずる学校の児童・生徒は無料で観覧できます
交通案内	近鉄・奈良駅　1 番出口から奈良公園に向かって徒歩 5 分 JR・奈良駅　東口バス乗り場から奈良交通バスにて 5 分「県庁前」下車 100 メートル

▼同時開催または会期中の催し

会期中の催し （当館主催事業）	◆講演会「富本デザインの魅力―初期の創作活動を中心に―」 講師：山田俊幸氏（元帝塚山学院大学教授） 日時：7 月 23 日（日）14 時～（13 時 30 分開場・約 90 分） 場所：当館 1 F レクチャールーム（60 席） ※当日 13 時 15 分から整理券を配布、先着順。 ◆美術講座「奈良県立美術館と富本憲吉」　講師：飯島礼子（当館指導学芸員） 日時：8 月 20 日（日）14 時～（13 時 30 分開場・約 90 分） 場所：当館 1 F レクチャールーム（60 席・当日先着順） ◆当館学芸員によるギャラリートーク 日時：7 月 15 日、8 月 5 日、8 月 26 日（いずれも土曜日）14 時～・展示室にて ※上記イベントへの参加には当日の観覧券が必要です。 ※新型コロナウイルス感染拡大防止にご協力をお願いいたします。
ギャラリー展示 （1F ギャラリー） ※入場無料	「奈良・町家の芸術祭はならぁと」による展示 期間：8 月 1 日(火)－9 月 3 日(日) ※詳細は追って美術館公式ホームページ等で紹介します

取材のご依頼 広報に関するお問い合わせ	奈良県立美術館（展覧会企画担当：指導学芸員　飯島礼子） 〒630-8213 奈良市登大路町 10-6 TEL 0742-23-3968　FAX 0742-22-7032

広報用画像リスト ＋ 作品の一言解説

◇展覧会広報用に下記の画像を用意しております。ご希望の画像の番号（1～5）をお知らせください。
◇必ず下記の**キャプション**もご掲載ください。
　ただし、ルビ（ふりがな）を付ける・付けないの判断と西暦・和暦の選択は各メディアに委ねます。
◇掲載にあたり作品部分のトリミング、文字載せはご遠慮ください。

No.	画像	キャプション	一言解説
1		楽焼草花模様蓋付壺 （らくやきくさばなもようふたつきつぼ） 1914（大正 3）年 奈良県立美術館蔵	本格的に陶器制作に取り組みはじめたころの作品。素朴な雰囲気の絵付けで植物を表しています。 開館記念展出品作品。
2		白磁八角蓋付壺 （はくじはっかくふたつきつぼ） 1932（昭和 7）年 国立工芸館蔵 撮影：エス・アンド・ティフォト	大正 8 年ごろから始まった白磁の制作は富本が継続的に取り組んだテーマのひとつで、東京移住後も力作が生み出されました。本作もその一つで、豊かなボリュームと安定感、しっとりとした釉調に、富本が重んじた「形」が生み出す美を感じることができます。
3		色絵椿模様飾箱 （いろえつばきもようかざりばこ） 1941（昭和 16）年 京都国立近代美術館蔵	昭和 11 年の九谷滞在以降、色絵の作品が増えていきます。本作は力作が多く確認されている昭和 16 年に制作されたもの。天面に描かれた椿の花に、赤と染付の格子で彩られた側面の対比が鮮やかな飾筥です。開館記念展出品作品。
4		赤地金銀彩羊歯模様蓋付飾壺 （あかじきんぎんさいしだもようふたつきかざりつぼ） 1953（昭和 28）年 奈良県立美術館蔵	京都に拠点を移した富本は、金と銀を同時に焼き付ける金銀彩の技法を完成させました。本作は同じく京都時代に創案した羊歯の連続模様を金銀彩で表した飾壺です。華麗で重厚な雰囲気を備えた、富本の代表作です。
5		色絵金銀彩四弁花文飾壺 （いろえきんぎんさいしべんかもんかざりつぼ） 1960（昭和 35）年 国立工芸館蔵 撮影：米田太三郎	金銀彩技法を応用した「かきおこし」という手法で四弁花模様を描いた飾壺です。赤で描いた模様に金銀を乗せることで白地の金銀彩を実現させたもので、赤地金銀彩とは違う清新な印象をもたらしています。開館記念展出品作品。

奈良県立美術館◇〒630-8213 奈良市登大路町 10-6◇TEL 0742-23-3968　FAX 0742-22-7032◇https://www.pref.nara.jp/11842.htm